

Mi tercer sitio, Argentina

Mayo cordobesa

¡Hola! 今年の夏は規格外の暑さでしたね。また、相次ぐ台風や私の故郷・北海道を襲った大地震など、(自然には勝てないなあ・・・)と強く感じた夏でもありました。最近はややく秋の気配を感じるようになってきました。季節の変わり目ですので、くれぐれもご自愛くださいませ。

「季節の変わり目」と言えば、私が初めてアルゼンチンへ行ったのは2015年の9月上旬で、まさに冬から春への変わり目でした。しかし、日中の気温は30℃近くになる日もあり、私が「こんなに暑くて、もう春だね。」と言うと、「9月21日にならないと春じゃない。」とか、「21日になるまではどんなに暑くてもまだ冬だ。」などと言われました。アルゼンチンでは、3ヵ月毎の21日に季節が変わるのだそうです。これは非常に興味深いことでした。日本では、例えば朝のニュース番組で「4月1日、今日から新年度の始まりです。」という挨拶はあっても、春分の日「今日から春です。」とは誰も言いません。でも9月21日のアルゼンチンには、「¡Feliz primavera!」と春をお祝いする挨拶が溢れます。日本人は「曖昧の文化」だと言われていますが、季節の移ろいさえも、それぞれが感じる気温や四季の花々、虫の声などで各人が無意識に判断しているんだなあと初めて気づき、とてもおもしろいことだと思いました。

それでは今回は、児童養護施設でのボランティア活動について少しご紹介しましょう、
¡Vámonos!

1. 人懐っこさの陰にあるもの

私がお手伝いをしたのは「Eva Perón」という名前の施設で(もしかしたらエヴィータが助成したのかも知れませんが、そのことは帰国後に気づきました)、就学前から小学6年生までの子供たちが約20人ほど生活していました。ボランティア事務所の担当者の話によると、親が病気のため養育できないという理由で預けられている子供は幸せな方で、失業率が高いアルゼンチンではお酒を飲んで暴力を振るう父親が多いそうで、そのような事情を抱えた子供がたくさんいるということでした。

心に傷を負い、家族と離れて淋しい思いをしながら過ごしている子供たちにどうやって近付けばいいだろうか、初めて会う私を受け入れてくれるだろうか、せめてスペイン語で十分に意思疎通ができればいいのだけれど私にそれは無理だし・・・と不安な気持ちを抱えながら施設に入りました。

・・・が、私の心配は、全くの取り越し苦労でした。

「私は Mayo です、日本から来ました。」と挨拶すると、みんなが「オ～ラ、マ～シヨ！」と次々に寄って来て besito (右頬をくっ付ける挨拶) をしてくれたり、「Mayo,

Mayo, mayonesa! (mayonesa はマヨネーズの意味)」と即席の歌を歌いながら踊り出す子供もいました。純粹で本当にかわいらしい笑顔で迎えてもらえてホッとしました。

2. さすがアルゼンチン！

さて、毎週月曜日は地元の大学で体育を専攻している学生たちが子供たちに運動を指導しに来る日でした。

歩いてすぐのところにある広い空き地でサッカーをした日のこと。子供たちのボールの足さばきの見事なこと！そして、施設職員の 40 代後半くらいの女性もびっくりするくらい上手で、ドリブルで子供たちの間を抜いて行くし、パスも正確だし、ゴールを決めるし、(うわぁ～、さすがサッカー大国、アルゼンチンだ！！)と、私はポカンとして眺めていました。



写真：体育指導の大学生たちと園庭で。右から 3 番目が私です。

子供たちはサッカーを始めると途端に熱くなり、ラフプレーがあると相手にボールを思い切り投げ付ける、殴る、蹴ると本気の喧嘩に発展するので、それを止めることも大人たちの大事な仕事でした。私も一度、思い切り蹴ったボールが明後日の方向へ行き、男の子の背中をかなりの勢いで直撃してしまったことがありました。(今のは相当痛かったはず！大丈夫かな??)という焦りと、(ひょっとして、私も殴られるのかしら・・・)と少し心配になりながら必死に謝っていると、「大丈夫、大丈夫。Mayo はわざとやったわけじゃないし、全然問題ないよ。」と何とも大人の対応をしてくれたのです。故意なのか偶然なのかをきちんと判断できるのはすごいです。

彼らは園庭にある小さなサッカーコートで毎日、何時間もサッカーをしていました。中には、親や里親がお金を出してくれてサッカー教室に通っている子供もいました。一緒に遊んだ子供たちが、将来サッカー選手として活躍している姿を見られたらとても嬉

しいです。

サッカー以外に、(自分も含めて、日本の子供たちにはない文化だな。)と思ったのは、嬉しかったり楽しかったり、あるいは相手を祝福したいときなどに自然と踊り出すことです。男女ともに、小学生とは思えないくらい実に色っぽく(?)腰をくねらせながら歌って踊るのです。第一章に書いた「マヨネーズダンス」も、私に対して歓迎する気持ちを表してくれたものだったのでしょう。

私たちにも日本舞踊という素晴らしい文化がありますが、子供が感情表現のために簡単に踊れるものではありませんし、真似することさえ無理です・・・。「ラテンのノリ」と言っているのかどうか分かりませんが、子供たちの生活にもダンスが普通に浸透していることに文化の違いが見えて、これも非常に興味深いことの1つでした。

子供たちと何をして過ごすかについては、ボランティア事務所からも施設の職員さんからも、「これをやってください。」とは一切言われませんでした。必要なものは事務所にお願ひすれば用意してくれて、すべてが私の自主性に任されていました。このことは事前に知らされていたので私は日本から折り紙を持って行ったのですが、これが子供たちに大好評で、小学校から帰って来るとカバンを置く前から「Mayo, ORIGAMI しよう!」と言うくらい夢中になっていた子もいました。

今回は折り紙による交流と、農作業についてご紹介します。最後までお読みくださいますとありがとうございます、¡Hasta luego!



写真：活動初日に Caleb という男の子が、園庭の花を摘んでプレゼントしてくれた花束です。センスがとても素敵だし、初対面の女性に花束を贈っちゃうなんて、さすが！